

二〇二二年度入学選抜試験問題

国語

(六〇分)

問題は□から■まで(18ページ)ある。

解答は、すべて別紙の解答欄に記入すること。

文字は正しくていねいに書くこと。

句読点も一字に数える。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

タレスやアナクシマンドロス、アナクシメネスといった古代ギリシアの哲学者たちは、一般に「自然哲学者」と呼ばれている。文字通り、自然はいつたいどういうメカニズムで動いているのか、その原理を「神話」ではなく観察を通じた「思考」によって明らかにしようとした人たちだ。

哲学(philosophy)の語源は、*philia*(愛)と*sophia*(知)。古代においては、知を愛し探究することは、なんでも哲学とされていた。だから、今なら「自然科学者」と呼ばれる人たちもまた、当時は「自然哲学者」と呼ばれていたのだ。

彼ら自然哲学者たちは、満足な実験道具も技術も持っていなかった。だから、もつぱら「考える」ことに頼って世界の謎に
取り組んだ。

今の科学から見れば、それはほとんど子どもだましみたいなものだ。だからその観点からいえば、古代の自然哲学は、たしかに科学に取って代わられたといえるかもしれない。

いや、むしろ、自然哲学は自然科学へと「進化」したのだというべきだろう。宗教が哲学のお母さんだったように、哲学もまた、その思考や方法(観察・実験など)の進展に伴って、近代の科学を生み出すことになったのだ。

でもその一方で、哲学は科学とは別の方向にも自らを進化させてきた。

その生みの親こそ、タレスら自然哲学者たちから一世紀あまり後に登場した、西洋哲学の父ソクラテス(とその弟子プラトン)だった。

ソクラテスはこんなことを考えた。

哲学が真に考えるべき問題、それは、自然哲学が問うているような「自然」や「世界」についてじゃない。むしろ、この世界を問うているわたしたち「人間」自身である！

古代ギリシアのアポロン神殿には、「汝自らを知れ」という格言が刻まれていた。ソクラテスは、まさにこれこそ、哲学が探究すべき根本テーマだといったのだ。

外から内へと目を向けること。これはある意味では、人間の精神が幼年期から青年期へと成長したことのあらわれだったともいえる。

赤ちゃんや子どもは、いつでも外の世界に興味津々だ。虫や葉っぱや土なんかをさわって、大げさにいえば、世界がどうなっているのかを知ろうとする。

でも、思春期をむかえるころから、僕たちはだんだんと自分自身に目を向けるようになる。「どんな人生を生きるべきだろう?」「自分には何が向いているんだろう?」「幸せってなんだろう?」そんなことを考えるようになる。

自然哲学からソクラテス哲学への展開もまた、おそらくはそれと同じような出来事だったのだ。

ちなみに、ソクラテスが生きたのと同じ紀元前五世紀頃、中国には孔子が、インドには仏陀が登場している。彼らもまた、「人間とは何か?」「人生はどう生きるべきか?」といった、まさに人間について考えた人たちだった。

同じ時代、同じような問いを考えた人たちが、不思議なことにまったく異なる文明に現れた。

今から二五〇〇年前、人類はトツジョとして知の大革命を経験したのだ。

ソクラテスの考えを、哲学と科学の関係という観点から、僕なりにダイタンにいい直してみたい。

科学が明らかにするのは、いわば「事実の世界」のメカニズムだ。それはたとえば、物を手放せば落ちるとか、DNAは二重らせん構造をなしているとか、人は恋をしている時、脳の腹側被蓋野が活性化しているとか、フェニルエチルアミンやドーパミンがブンピツ^③されているとかいった、文字通り「事実」の世界だ。

それに対して、哲学が探究すべきテーマは、真善美をはじめとする、人間的な「意味の世界」の本質だ。

「ほんとうのことってなんだろう?」「よいことってなんだろう?」「美しいことってなんだろう?」そして、「人生いかに生くべきか?」

こうした意味や価値の本質こそ、哲学が解き明かすべき問いなのだ。

僕たちは、科学が対象とする「事実の世界」だけじゃなく、豊かな「意味の世界」もまた同時に生きている。恋をした時の僕たちは、フェニルエチルアミンがどうというより、その味わい深い恋の「意味の世界」をこそ生きる。

哲学者の西研(1957)がいうように、科学は、恋をしている人の脳からどんな化学物質が出ているかを明らかにすることはできる。でも、僕たちにとって恋とはいったい何なのか、その「意味」の本質については、ほとんど何も教えてはくれない(『哲学的思考』)。

それを明らかにするのは、哲学の仕事なのだ。

さらにいえば、哲学が探究する「意味の世界」は、実は科学が探究する「事実の世界」に原理的に先立つものだ。

え? どういうこと?

と、多くの人は疑問に思うんじゃないかと思う。

僕たちの多くは、ふだん、世界は科学的な法則に支配されていると思っ込んでいます。天体法則とか人体のメカニズムとか、脳の働きとかDNAの仕組みとか、そういった「事実」こそが先にあるのであって、「意味」は、そうした事実人間があとからくつつけたものだと考えている。

でも、事態はまるっきり逆なのだ。

というのも、いわゆる「事実」は、僕たちの「意味の世界」のアンテナにひっかからないかぎり、決して「事実」として認識されることがないからだ。⁴

たとえば、天体法則という「事実」が存在するのは、僕たちがこの法則に「意味」を見出しているからだ。

太古の昔から、人類はノウコウを行うためにそのメカニズムを知る必要があった。あるいはその「美」に魅せられて、天体を観察しつづけてきた。

同じように、人体のメカニズムを僕たちが知っているのは、それが僕たちにとって意味あるものであるからだ。健康や長寿に「意味」を見出しているからこそ、人類はその謎に挑みつづけてきたのだ。

もしも僕たちが、こうした「意味」のアンテナを持っていなかったなら、天体法則や人体メカニズムといった「事実」は、僕たちにとって存在することさえなかっただろう。

いやいや、それはそうかもしれないけど……と、まだ腑に落ちない方も多いだろう。

たしかに、「事実」は僕たちの「意味」のアンテナにとらえられないかぎり、僕たちにとって存在しないのかもしれない。でも、たとえそうだったとしても、天体法則はやっぱり客観的に存在するし、DNAは太古の昔から二重らせん構造をなしていたんじゃないの？ つまり、科学的な事実、人間がいようがいまいが、やっぱり客観的な事実といえるんじゃないの？ そう思う人もいるだろう。

でもそれは本当だろうか？

⑤ キョクタンな話をすれば、もしも人類よりはるかに知能が進んだ宇宙人がいたとしたら、彼らの住む「事実の世界」は、僕たちの世界とは大きく異なっているだろう。三次元や四次元どころか、彼らは二〇次元くらいの世界に生きているかもしれない。その世界では、DNAは二重らせん構造をなしていないかもしれないし、時間だって存在していないかもしれない。

いや、そんなとっぴな例を持ち出さなくても、もっと身近な、たとえば犬やネコやカラスなんかを考えてみてもいい。

犬やネコは、人間のように色を認識できないといわれている。一方カラスは、人間には認識できない紫外線を認識できる

という。だから、どうやらお互いを黒色とは認識していないらしい。

要するに、犬やネコやカラスは、僕たちにとっての「事実の世界」と、いくらか異なった世界を生きているのだ。それはつまり、僕たちもまた、「僕たちにとっての事実の世界」をしか生きられないということだ。

(中略)

僕たちは、僕たちの「意味の世界」に照らし出されたかぎりにおいてしか、「事実の世界」を知ることにはできないのだ。

無色透明な「A」の世界(客観的な真理)なんて、僕たちは決して知り得ない。それはいつも、僕たちの「B」の世界の色を帯びているのだ。

これが、「C」の世界は「D」の世界に原理的に先立つということの意味だ。

こうして、「意味の世界」の本質を明らかにする哲学は、科学の営みの土台をなすものだとすることができる。

繰り返しいってきたように、「事実の世界」は「意味の世界」を土台にして成り立っている。それはつまり、僕たちは「意味の世界」のことを深く理解しないかぎり、「事実の世界」のこともちゃんと理解できないということだ。

(中略)

たとえば、僕がかつて恋を科学的に分析する論文や本をたくさん読んだのだけど、その時「あれ？」と思ったことがあった。

前講でもいったように、人が恋をしている時は、脳内からフェニルエチルアミンやドーパミンやオキシトシンといった化学物質が出ているという。

でも、僕が読んだかぎりでは、そもそも何をもって恋とするかにおいて、恋愛を研究している科学者たちの間にはどうもズレがあるようなのだ。

人によっては、それは「愛」とほぼ同じものと考えられている。また、人によっては「性欲」と同一視されている。そんな

ふうに、人によって何を恋とするかがバラバラだから、研究の成果にもいくらかはらつきがあるように見えた。

だから、本当は科学者だって、「そもそも恋って何なのか？」とその「意味」の本質に向き合う必要があるのだ。そうでなければ、それぞれが思い思いにとらえた恋を研究することになって、恋の科学はいつまでも混乱しつづけることになるだろう。要するに、「恋の哲学」が先になければ、「恋の科学」も本来なり立たないはずなのだ。

もちろん、科学はいつでも哲学を必要とするわけじゃない。でも、もしも科学者たちが、「あれ？ 自分が研究しているこの「事実」って、そもそもいったい何なんだ？」と疑問を持つことがあったとしたら、その時こそ哲学の出番なのだ。

(苦野一徳^{とまの}はじめての哲学的思考』による、一部字体を変更した箇所がある)

問一 —— 線部①⑤のカタカナを漢字に改めよ。

問二 —— 線部1「世界の謎」とあるが、「自然哲学者」が取り組んだ「世界の謎」とはなにか。説明せよ。

問三 —— 線部2「それはほとんど子どもだましみたいなものだ」とあるが、なぜ「子どもだまし」みたいなものか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えよ。

ア 十分な器具や技術を持たないで、自然の原理を解き明かそうとしたから。

イ 科学を否定している哲学者だけで、この世のメカニズムを説明しようとしたから。

ウ 知を愛し求めることこそが、科学にとってもっとも大切だと思い込んでいたから。

エ 自然を空想や夢の世界として、わかりやすい説明こそが認められると思っていたから。

問四 —— 線部3「知の大革命」とはどのような変革のことか。説明せよ。

問五 — 線部4「僕たちの『意味の世界』のアンテナ」とは
どのようなものか。説明せよ。

問六 空欄 に入れるのに、最も適

切な組み合わせを次の中から選び、記号で答えよ。

- | | | | | |
|---|------|------|------|------|
| ア | A 意味 | B 事実 | C 事実 | D 意味 |
| イ | A 意味 | B 事実 | C 意味 | D 事実 |
| ウ | A 事実 | B 意味 | C 事実 | D 意味 |
| エ | A 事実 | B 意味 | C 意味 | D 事実 |

問七 — 線部5「『恋の哲学』が先になれば、『恋の科
学』も本来なり立たないはずなのだ」とあるが、なぜそ
のように言えるのか。説明せよ。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「いい思い出」を作ろうという担任の提案で三十人三十一脚に出場することになった。運動音痴の「私」は、隣に並ぶ奥山君に助けられ、クラスメートにひやかされながらも懸命に練習したが、予選で転んでしまった。その経験にとらわれたまま大人になった「私」が、同窓会に出席した。

「私、今日は、教えてほしいことがあって」

宴うたげの席は徐々にバラけて、早めにぬける遠来組やトイレ籠城組の空席が目立ちはじめていた。急に居住まいを正した私に、あっちんと内田がわかりやすく瞳の落ちつきをなくす。

「あの、予選の日のことなんだけど」

「予選？」

「あの日……あのとき、私、転んで、それで負けちゃって。そのあと私、救護室へ行ったじゃない」

「あ……ああ」

「や、そうだった？」

¹私の目を見ない二人の声がかぶった。あっちはもはやサワーに手を出さず、内田もビールの泡がしほむにまかせている。

「あのあいだに、なんかあった？」

「なんか？」

「救護室からスタンドへもどいたら、急にムードが変わってたから。泣いてたみんなが元気になって、なんだかへんな空気で……あの感じ、私、ずっと忘れられなくて」

「あの感じ？」

「ね、なんかあったんだよね」

あっちんと内田が額を突き合わせ、目と目でなにかを相談する。

口を開いたのは内田だった。

「いや、その、なんかあったってほどじゃないんだけどさ」

「でも、あったよね」

「ん、まあ」

「教えて」

「いや、その……ちょっと、言いづらいんだけど」

「大丈夫。言って」

お尻をもぞもぞしだした内田の手がおしほりを取り、意味もなく裏返す。

「決勝進出が消えて、あのととき、オレらその、まだガキだったからさ、やっぱくやしいってんで、泣いたりしてたんだ」

「うん」

「飯田の前で言うのもナンだけど」

「大丈夫。泣いてたのは知ってるから」

「ほぼ全員、泣いてた」

「うん」

「みんな、なかなか泣きやまなくて。で、なかにはその、あの、言いづらいんだけど……」

「言って」

「飯田が転んだせいだとか言いだすヤツも、やっぱ、いて」

「うん」

「飯田が転んだのは奥山のせいだとか言いだすヤツもいて。だれが速すぎたとか、だれが出遅れたとか、だれの紐ひもの結び方が悪かったとか、どどん、やなムードになってきて、それで、そしたら……」

「うん」

「その……」

はっきりしない内田の横から、**A** あっちゃんが割って入った。

「そしたら、真梨江先生まりえが泣きだしたんだよ。私たちのだれよりも激しく、爆発的に」

「は？」

真梨江先生？

「ここでケンカしたら六年二組の思い出がだいなしだって、真梨江先生、すごい勢いで泣きだして、止まらなくて。私だって悲しくてくやしい、でも、ここは笑顔で終わらせなきゃいい思い出にできないんだって、わあわあ泣きながら言うの。大人があんなに泣くの見たの、初めてだったから、もうみんな、びっくりしちゃって、おろおろして。クラス全員、一気に泣きやんだんだ。ぴたっと、ほんとに、**B** みたいに」

そうなんだよ、と内田がにわか勢いづいて言った。

「先生があんまり泣くもんだからさ、オレら、もう泣いてる場合じゃなくなっちゃって、あわててフォローにまわったんだよな。負けたけど最後までがんばれてよかったとか、最高の思い出になったとか、夢をありがとうとか、もう必死で。母親たちも一緒になって、元気をもらった、感動をもらった、ありがとうありがとうの大合唱で」

「気がついたら、テレビカメラがその姿に食いついてて、それでやっと先生、泣きやんだんだよね。マスクラ落ちてるから今のはカットして、って」

「……………」

あつけにとられて、声もなかった。私が救護室にいるあいだ、まさかそんなことが起こっていたなんて。

頭の整理がつかない。自分のなかでふくれにふくれていた想像とかけはなれすぎている。

「私、真梨江先生がみんなに言ったのかと思ってた。私が転んだことは言っちゃいけないとか、悪いことは忘れようとか」

「ううん、そうじゃなくて」

昔とおなじどんぐりまなこで、あつちんが頭をふる。

「ま、ネガティブなことか言うと、また真梨江先生が泣きだすんじゃないかって恐怖はあったかもしれないけど。でも、それよりも、子どもは子どもなりに、やっぱり琴ちんのこと心配して、そつとしといてあげようって思ったんだよ」

「私のせいで負けたの？」

「だから、琴ちんのせいじゃないって。あの日は、みんなが興奮してスピードあげすぎて、ペースが狂ってたんだよ。あれは、クラス全員のミス」

「てか、そもそも優勝したチームのタイム見たら、オレらと全然、格がちがったじゃん。メジャーリーグと少年野球くらいの差があったよ。決勝進出なんて、どだい夢の夢だったんだ」

いともからりと内田が言っただけ、泡のつぶれたビールを喉へ流しこんだ。

「ま、オレはきれいなレポーターにサインもらって、もうそれだけで大満足だったけどな。芸能人と会ったのも生まれてはじめてだったし」

「あ、私もサインもらった。あれ、どこやったかな」

初めてドーランを塗った大人を見た。帰りにお母さんたちがたこ焼きを買ってくれた。後日、テレビに真梨江先生の号泣シーンがノーカットで流れていた。オレのつむじも〇・五秒だけ映った。みるみる声を軽快にしてもりあがる二人を前にして、私は十五年間、後生大事に抱えつづけたしこりの収めどころを失い、呆けたようにまばたきをくりかえした。

なあんだ。みんなにとつてあれは、真梨江先生の思惑おもわくとは関係なしに、本当に「いい思い出」³になっていったのか。敗退の痛みなどはとうに克服し、子ども時代のまたとない珍経験へと昇華させていたのか。あの転倒を今も引きずっているのは、転倒

した本人だけなのか――。

(中略)

私以外にもう一人、あの日を笑って語れないはずの人がいる。

大事な用件がまだ残っていた。

「奥山くん」

個室の前で待ちぶせし、もどってきた奥山くんを捕まえたのは、飲み放題の終了まで残すところ十五分の土壇場だった。早く、早くと自分をせつつきながらもなかなか思いきれず、彼がトイレへ立ったのを最後のチャンスと、ようやく重い腰を上げたのだった。

(中略)

「六年生のとき……」

軽く、軽く、軽く。私の重石おもしを奥山くんになすりつけないように。

「転んじゃって、ごめんね」

笑って言えた。笑わなきゃ言えなかった。

「あのころ奥山くん、いつもすごく優しく、練習でもいつも助けてくれて、なのに肝心の本番で私、転んじゃって、そのせいで奥山くんにまで迷惑かけちゃって……。ありがとも、ごめんねも言えないままだったこと、ずっと気になってたの。もう昔のことだし、奥山くんは忘れてるかもしれないけど、私は忘れられなくて。だから、今日はそのことちゃんと話して、それで、終わりにしたかったの」

つかえながらもどうにか言いきった。直後、奥山くんの目が混乱の火花を散らしているのを見て、どきっとした。

「あ、あの、ほんとにごめんね、今さら。聞いてくれてありがとう。じゃ……」

言うだけ言って逃げようとした私を制するように、そのとき、奥山くんが
C 掌てのひらを突きだし、張りつめた声を響かせた。

「触って」

「え」

「触ってみて」

血色のいい大きな掌。触って？ 意味がわからず瞳で問うも、奥山くんは一文字に結んだ口を動かさない。どうやらそのままの意味らしい。

私はこくりと息を呑み、震える手をさしのべた。人差し指と中指、二本の指先でそっと眼下の掌に触れる。ぬめりとした。

「濡れてるでしょ」

「はい？」

「汗っかきなんだ」

「え」

「とくに、緊張するとすぐ汗が出て」

「あ……」

「今ならふつうに言えるけど、子どものころはすっごく、それが恥ずかしくて。どうしても、だれにも、知られたくなくて声をなくした私の前で、あいかわらず白い奥山くん首筋がみるみる赤く染まっていくな。」

「あの日……あの予選の日も、ぼくの手、汗でびっしょりだった。気がつかなかった？」

問われて、ハッと息をつめた。あの日。スタートラインで肩と肩を組みあわせた瞬間の、奥山くんの掌。いつもよりそっけなく感じた記憶はある。感触は？ 思いだせない。首を横にふった。

「そんな余裕なくて」

「すごい汗だったんだ、緊張して、あのムードにやられちゃって。紐を結ぶときも、腕を組むときも、バレたらどうしようって、すごくびくびくしてて。飯田さんが転んだとき、あれが絶頂だった。ほくのせいだ、ほくが汗ばっか気にしてたからだってパニックって、ますます手がびしょびしょになって……」

ごめん、と奥山くんが悲痛な声とともに低頭する。

「その濡れた手を、どうしても、飯田さんに、さしだせなかった」

「……………」

⁴時間が止まった。時がもどった。十五年前のあの日、地べたに転がる私を無表情に見下ろしていた奥山くん。どうしても気がいただろう。そのこぶしが大量の汗を抱いていたなんて。いつも冷静で、おだやかで、大人びていたあの男の子が、それほど重圧に震えていたなんて。

子どもだったんだ。ふいに、その当然の事実が **D** 胸に落ちた。奥山くんも、私も、もしかしたら真梨江先生も、あのころはみんなまだ本当に子どもだったんだ——。

「あれからよく、飯田さんの顔、とてもじゃないけどまともに見られなくて、謝る勇氣もないまま卒業しちゃって、それが、なんていうか、ずっとこのへんに引つかかって……」

このへん、と奥山くんのこぶしが鳩尾みぞうちのあたりを叩いた瞬間ただ、はじかれたように私の涙腺がゆるみ、彼の背後にうかぶ上弦の月がぼやけた。

「だから今日、飯田さんと話ができてよかった。ほんとによかった」

「奥山くん……」

「SPやっていると、どうしてもあの日のことを思いだすんだ。どんな要人守っても、セレブ守っても、クラスメイトの女子一人守れなかったら、ただのポンコツだなんて」

⁵十五年間、私とおなじ重さを負ってきてくれた元パートナー。その肩からようやく力がぬけて、なつかしい観音の笑みかも

どった。

(森絵都『出会いなおし』所収「むずびめ」による)

問一 ——線部1「私の目を見ない」とあるが、二人がこのような態度を取るのはなぜか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 「私」をいつまでも失敗を引きずる付き合いにくい人だと感じていたから。

イ 「私」以外のクラスメートで共有する思い出に立ち入ってほしくなかったから。

ウ 「私」には予選敗退の責任があると感じていることを知られたくなかったから。

エ 「私」の失敗に対する厳しい発言があったことを今でも伝えたくなかったから。

問二 空欄 A ・ B に入れるのに、最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

ア 天を仰いだ イ 水を打った

ウ お茶を濁した エ くぎを刺した

オ 業を煮やした

問三 ——線部2「自分のなかでふくれにふくらっていた想像」とあるが、なぜ「ふくれにふくらっていた」のか。説明せよ。

問四 ——線部3「本当に『いい思い出』になっていた」とあるが、「本当」の「いい思い出」とはどのようなものだと「私」は考えているか。説明せよ。

問五 空欄 C ・ D に入れるのに、最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

ア じつと イ ぬっと ウ はつと

エ きちんと オ すとんと

問六 ——線部4「時間が止まった。時がもどった」とあるが、このとき「私」はどのような心境に「もどった」のか。具体的に説明せよ。

問七

——線部5「私とおなじ重さを負ってきただけ」と

あるが、I 奥山くんが負ってきたものはどのようなことか。II その「重さ」が奥山くんと「私」のこれまでの生き方にどのような影響を与えてきたことを表しているか。それぞれ説明せよ。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。なお、

I

II

は段落番号を表す。

I 大和国添上郡山村の里に、ひとりの長母有りき。姓名あきらかならず。その母に女有りき。嫁ぎてふたりの子を

めり。聾の官、県の主宰に遣はされ、因りて妻子を率て、任けられし国に至りて、歳余を経たり。但妻の母、土に留まりて

家を守りき。たちまちに女の為に夢に悪しき瑞相を見き。すなはち驚き恐り、女の為に経を誦ぜむと念ふに、貧しき家なるに

より、敢へてなすこと得ず。心に念ふにたへず、自ら著たる衣を脱ぎ、洗ひ浄めささげて誦経に奉らむとす。然るに凶しき

夢の相、また猶し重ねて現る。母ますます心に恐り、また著たる裳を脱ぎ、浄めあらひて、以て先のごとくに誦経を為せり。

女は任県の国司の館に在り。生める子、館の庭の中に遊び、母は屋のうちなり。ふたりの子、僧七はしら有りて、居たる屋の

上に坐て、経を読むと見る。ふたりの子、母に申して言はく、「屋の上に法師七はしら在りて、経を読み。すみやかに出で

て見たまふべし」といふ。その経を読む音、蜂の集り鳴くがごとし。母聞きて、怪しび起ちて後の屋より出づれば、すなはち

居処に当れる壁たふれぬ。また七はしらの法師もたちまちに見えず。女大きに恐り怪しび、自ら内心に念はく、天地吾を助

けて、
Xとおもふ。

II 後家を守る母、使を遣はして到り問ひ、凶しき夢の状をのべ、経を読みし事を伝ふ。女、母の伝ふる状を聞き、大き

に怖りて心を通はし、ますます三宝を信じまつりき。すなはち知る、誦経の力と三宝の護念となることを。

(『日本霊異記』による)

【注】 *大和国添上郡 現在の奈良県奈良市の地。 *長母 老母。 *聾の官 娘の夫である役人。

*県の主宰 地方官。 *瑞相 前兆。 *経を誦ぜむ 僧に布施して誦経を依頼しよう。

*僧七はしら 僧七人。

問一 〓 線部 a 〓 c の「母」は、それぞれ~~~~線部ア「長母」、イ「女」のどちらを指しているか。それぞれ記号で答えよ。

問二 〓 線部 1「母ますます心に恐り」とあるが、何を恐れたのか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 娘が蜂に刺されること
- イ 娘に仏の罰がくだること
- ウ 娘に悪事がふりかかること
- エ 娘が悪夢に苦しめられること

問三 X に入れる内容として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 夢にあらわれた
- イ 後の屋に入っていた
- ウ 壁が倒れかかってきた
- エ 壁に押し倒されなかった

問四 I の段落は二つの場面からなっている。後の場面はどこからか。始めの五字を抜き出して答えよ。

問五 〓 線部 2「七はしらの法師」は何を表すと考えられるか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 子どもの不思議を受容する力と人の誠
- イ 娘を思う母が捧げた読経の力と仏の加護
- ウ 教えを守る娘の仏法を信じる心と母の愛情
- エ 信仰される仏の悪を憎む心と子どもの素直さ

